

# 戦時下の新聞と言論

## — 抵抗の新聞人・桐生悠々の「迷走」と「再生」 —

話題提供 **増田 正昭** さん (信濃毎日新聞社編集委員)

日 時 **9月28日(土)** 午後1時30分～3時30分(予定)

会 場 **あがたの森文化会館 講堂第一会議室** 参加費 200円

※ 電話での事前申し込みが必要です

「抵抗の新聞人」として知られるジャーナリストの桐生悠々(1873～1941)は、1933(昭和8)年8月11日の社説「関東防空大演習を嗤ふ」で陸軍の作戦を批判し、在郷軍人の猛攻撃を受けて信毎を追われました。翌年、個人向けの雑誌「他山の石」を創刊し、そこを舞台に反軍・反戦の評論を書き続けました。特高から毎回のように発禁処分を受けるのですが、決して屈することなく、41年9月、68歳で病死する直前まで発刊し続けます。この時代、公刊された言論誌を舞台に戦時体制批判をするのは、稀有のことです。

戦後、作家の井出孫六さん(故人)や研究者らが「他山の石」に注目し、悠々の評伝や評論集を出版し、「抵抗の新聞人」「反骨のジャーナリスト」といった評価が定着しました。私も長年、そのような悠々像を抱いてきましたが、信毎150年史の編纂にたずさわり、悠々の社説やコラムをつぶさに読んでいくうちに、31年の満州事変を支持し、満蒙開拓も推進する社説を数多く書いていることを知りました。33年の教員赤化事件とも呼ばれた「二・四事件」では、検挙された教師たちを強く批判していました。

いままでの悠々像が崩壊するような衝撃と同時に、検証を怠ってきたことを反省しました。悠々は何を書いてきたのか、信毎を追われたのはなぜか、また信毎はなぜ悠々を守れなかったのか、悠々と信毎は33年8月の社説事件以降、どうなったのか？

そうした問いをテーマに、現在、文化欄に「抵抗の水脈」のタイトルで連載中です。

増田正昭(ますだ まさあき)さんは1954年生まれ。早稲田大学法学部卒。78年、信濃毎日新聞社入社。93～96年、日本の戦争責任をテーマに『戦争』への問い(70回)を連載。98年から編集委員、論説委員、2012年から編集委員。共編著に「世界市民への道」(明石書店)など。清泉女学院大学非常勤講師も務める。

☆テーマに沿って話題提供者の話のあと、気楽に懇談。自由にご参加ください。

主催：サロンあがたの森実行委員会 共催：旧制高等学校記念館・記念館友の会

申し込み・問い合わせ 旧制高等学校記念館 ☎35-6226 FAX 33-9986